

# 文化

戦争が終わって3年目の1948年ごろ、ちひろは人民新聞の記者をしながら、いろいろなところに載せるカットや挿絵を描いていた。絵描きとして仕事の幅を少しずつ広げ、念願の日本童画会へも入会する。そんなある日、勤めを辞める決心をさせる仕事舞い込む。

その時のことをちひろは後にこう書いている。「大へんものごしのやさしい女の方が、つとめ先にあらわれて、私にアンデルセンの『おかあさんのは

## 花と子どもの画家 いわさきちひろ 生誕100年

松本 猛 ⑫

### 紙芝居「お母さんの話」



紙芝居「お母さんの話」表紙 1947年 (ちひろ美術館所蔵)

## 子どもの本の世界へ一歩

なし』の紙芝居の絵をかいてくれといわれました。三千円も画料を払うというのです。あそこは三千円もあれば女ひとり

なら一カ月の生活は十分できたのです」

物腰のやさしい依頼者は日本民主主義文化連盟(文連)の稲

庭桂子という女性だった。この稲庭こそ、終生の友人となり、仕事のパートナーになる人物だった。稲庭はちひろより2歳年上で、戦前は劇作家を目指し、紙芝居の脚本を書いていた。戦中戦後に両親や妹を亡くし、二度と戦争を起させないと言戦後すぐに平和運動に身を投じた。

紙芝居「お母さんの話」は稲庭がアンデルセンの童話を紙芝居用に脚色したものだった。紙芝居の仕事は、大きな画面に色彩をつけて描くもので、それまでの仕事とは大きく違っていた。映画好きだったちひろにとって、物語の場面割りや、背景や人物設定を考え、表情やしぐさを工夫して描くことは大きな喜びだった。ちひろはこう述べている。

「私は一生けんめいになりました。ペンをつかったり、パステルをつかったり、何もかもごちゃまぜにした、どうしようもないような絵を何枚もかいたのですが、しあわせでしあわせでたまりませんでした」

この紙芝居は稲庭が立ち上げた「教育紙芝居研究会」から50年に出版され、文部大臣賞を受賞する。ちひろは、この仕事を機に、稲庭との紙芝居の制作はもちろん、子どもの本の世界に踏み出し、水を得た魚のように活躍しはじめる。

稲庭は57年に童心社を設立し、ちひろを使った紙芝居や絵本を次々と出版し、成功を収める。

稲庭桂子との出会いがなければ、絵本画家いわさきちひろは誕生しなかったかもしれない。(美術評論家)

土曜日に掲載します